



News Letter No. 8  
2014年11月30日発行

## 巻頭言

学術調査官として  
分子ロボティクスを担当して



東京理科大学  
根岸 雄一 先生

昨年の8月より本領域を担当させて頂いております。その間、国際シンポジウムに一度参加させて頂いたことに加え、私の個室にて、萩谷領域代表より直接、領域の目指す方向性についてご説明頂きました。領域の掲げる非常に夢のある目標に、研究者として心から楽しませて頂いております。

さて、学術調査官とは何者なのだと思われる方もいらっしゃると思いますので、ここではまずは、我々の役割を簡単に説明させて頂けたらと思います。学術調査官は、文科省より委託される非常勤の文部官で、文系理系を含む学術のさまざまな領域の大学および研究所の若手研究者より27名が選ばれており、そのうち化学系の学術調査官は4名おります。主たる任務は新学術領域研究のプログラムオフィサー

としての役割を果たすことであり、新学術領域研究の企画立案および運営管理を行っております。立場は事務方ですので、学術調査官は新学術の審査はしません。実際に審査をなされる方は、各委員会の審査委員の先生方です。我々はその内容をまとめて、審査所見を書くことが一つの仕事です。その審査所見には、調査官の観点からみて、「このようにしたらこの新学術はもっとよくなるのに」と思うアドバイスを入れたりもします。また、担当領域の運営会議に参加して、領域がうまく推進されるように縁の下から支えることも調査官の任務です。具体的には、制度の説明を行うとともに、事務的な質問や相談を受け付けています。また、調査官の視点から見て、領域にとって良かれと思われることを提案し、お忘れになられている実施予定事項を指摘させて頂いております。分子ロボティクスには、巡り合わせの関係から、なかなか行事に参加させて頂く機会が得られてはおりませんが、我々学術調査官も、領域を良くすることを目指す仲間ですので、是非とも今後は今までよりも多くの参加機会が得られればと思っております。

新学術は、誰もがご存じの通り、多くの研究者で組織されています。このとき、基盤研究と同じように、新学術でも各研究者が個人ベースで研究を進めて、それを足し併せれば良いというのなら、わざわざ新学術のような形で研究費を配分する必要はありません。新学術領域では、分野を超えたグループ研究だからこそ成し遂げられる研究が行われることが強く望まれています。また、そうしたグループ研究を通して、若手育成とアウトリーチ活動も強く望まれています。分子ロボティクスは、グループ研究でないと成し遂げることが困難な、非常に高く夢のあるゴールを掲げた領域だと思っております。是非とも、領域一丸となって、こうした夢を実現して頂ければと心より祈念しております。